ポルノ映画

『牝猫たち』

林久登　スタッフ

２０１７年　日活　８４分
監督　白石和彌　脚本　白石和彌
出演　井端珠里、真上さつき、美知枝

白石和彌といえば、実録ものの犯罪映画で最近注目されているが、その彼が、日活からオファーを受けて、ロマンポルノを撮るという。今までは、男の世界を中心に撮っていた白石が、初めて女の世界に踏み込む。しかも濡れ場シーンが１０分に１回あるポルノ。どう描くか興味があった。彼のデビュー作『凶悪』は日頃、目にしない犯罪の世界がきちっと描かれていて衝撃だったが、２作目の『日本で一番悪い奴ら』は、鮮度が落ちてきて、あまり面白くなかった。国家権力の腐敗ぶりを描いてインパクトはあったが、映画として何か喰い足らない。それは何なんだろうと考えた時、やはり、主人公の人間描写が甘いからだと思った。

しかし、この『牝猫たち』は、そんな思い込みは見事に外れた。風俗で働く女たちの人間模様が丁寧に描かれていて、ペーソスとエロスが共存し、一般映画と比べても遜色はない。

独り身で宿無しの雅子（井端珠里）、夫はいるが仮面夫婦の女里枝（美知枝）、子持ちのシングル結衣（真上さつき）３人は同じデリヘル店にそれぞれワケありで勤めている。この３人は美形でも肉感的でもない、ごく普通の女たち。でもすごく自然で生活感が出ていていい。ネットカフェに泊まり歩いている雅子が、仲間３人と、「風俗嬢がみんな悲惨だと思ったら大間違いだぞ！バカヤロウ」など叫び、大騒ぎをした後、夜の街を一人歩きながら涙を流すショットは素晴らしかった。白石はポルノに挑戦するにあたって「ネットを開けば誰でもエロ画面が見られる現在、結局、重要なのは人間を描けるかどうか」だと言っている。彼の言葉通り、３人のデリヘル嬢の生きざまが、見事に切り取られている。ロマンポルノ リブート５作品の中で最も私の気に入った作品だ。

逆に期待外れだった作品は、園子温の『アンチポルノ』。この監督は出演した女優を必ずスッポンポンにする。その腕力は買うが、物語性が欠落しているので、エロ度は低く、確かにタイトル通りで面白くない。